

レジリエンスという言葉がよく使われるようになってきた。国内では「強くしなやかな国民生活の実現を図るための防災・減災等に資する国土強靱化基本法」が成立し、関連の取組みが進められている。国際的な動向で重要なものを紹介するとすれば、二〇〇五年に神戸で開催された国連防災世界会議では「Building the Resilience of Nations and Communities to Disasters」が謳われた。ダボス会議の二〇一三年のテーマが「Resilient Dynamism」であったことも興味深い。レジリエンスは政策、科学技術、ビジネスの各分野において重要な潮流になっている。レジリエンスは災害や防災・減災の文脈で用いられることが多いが、「環境変化を乗り越える力」をあらわすより広範な概念である。建築・都市システム、環境システム、生態系システム、コンピュータシステム、組織やコミュニティ等の各種のシステムが、環境の急激な変化や困難な状況に直面した際にも、難局を切り抜けて生き残り、回復することのできる能力と考えることができる。さらには、試練を克服することで進化・深化し、適応し、成長する能力であり、システムが新しい均衡点に向けて動いていくしなやかな強さを意味する言葉として捉えることができるのである。レジリエンスは建築・都市の持続可能性（サステイナビリティ）の柱となる新しい概念であり、環境変化に負けない建築・都市システムを実現するため

各 人 各 説

# レジリエンス

— 環境デザインの新しいアートとして —

芝浦工業大学システム理工学部 准教授

増田幸宏

Yukihiro Masuda



の重要な視点である。

ところで、一九六五年のノーベル化学賞は、ハーバード大学のRobert B. Woodward先生におくられた。そのタイトルは“for his outstanding achievements in the art of organic synthesis”である。ここで使われているアートという言葉は大変奥深い言葉である。私の専門分野においても、環境デザインの新しいアートを獲得することが出来ないだろうか、という思いが私の原点にある強い気持ちである。「長い時を経て生き残る都市システムには共通の原理と合理性が存在する」「真に優れた環境には独特の調和のリズムが存在する」というのが現在の私の仮説である。ここでレジリエンスの概念が重要な役割を果たすと考えている。レジリエンスを手がかりに、持続可能性の新しいアートを具現化することができれば、建築・都市システム学の発展に大きく寄与すると考えている。激動の現代においては、変化と上手につき合いながら、衝撃を成長のエネルギーに繋げていくことが重要である。社会は今後ますます先を見通すことが難しい時代になっていく。環境条件の変化や不測の事態をどのように切り抜けるのか、外乱への対応力をどのように高めていくのか、時代の大きなうねりをどのように乗り越えていくのか、様々なバランスをどのように保つのか、その大きな指針となるような新しいレジリエンス学を構築していきたいと考えている。